

平安時代の脱定型経典見返絵—中尊寺金銀交書一切経—

緒方知美（筑紫女学園大学）

経絵という言葉は、一般的に二つの意味で用いられる。一つは、仏教経典にもとづく絵画をさす。もう一つは、経典の表紙の裏に描かれる見返絵のことをさす。ただし、美術史用語として経絵様式という場合の「経絵」とは、平安時代に盛んに制作された紺紙金字経典の見返絵をさす。

現在の日本美術史研究において、この経絵様式の権威とされるのは須藤弘敏氏である。須藤氏の研究「平安時代の定型見返絵について」（『佛教藝術』136 号 1981 年）では、12 世紀半ばに成立した経絵の定型構図を「画面の中心に正面向き釈迦説法図、上方に霊鷲山、下方に説話図を描くもの」と定義し、それまで不明確であった経絵様式の成立と展開に関して、その後の研究に決定的な影響を与えた。

しかし、須藤氏の研究にも問題点を指摘することができる。それは、須藤氏が、経絵様式の時代的展開を、定型成立を頂点とする一筋の流れとして単純化して把握しようとしたため、その定型という基準を逸脱する作品を考察の対象から除外していることである。須藤氏が考察の対象外とした作品群には、世俗画である絵巻と共通する表現が見いだされ、経絵の絵画史的位置づけのため重要な意義をもつものとして注目される。

本研究で対象とする「脱定型」の経絵とは、定型の中心モチーフである正面向き釈迦説法図を省略あるいは縮小したり、斜めに配置したりする作品である。平安時代の経絵のうち法華経は 40 余部確認されるが、その中で脱定型は 5 部を数える。一切経の場合は、上述した定義でいう 3 要素のうち画面下方の説話図が描かれない場合が殆どで、法華経の定型より構成要素が少ないが、中心モチーフを正面向きの釈迦説法図とする点で構図の基本は共通している。これを一切経の定型とみなすことができるとすれば、現存する 4 部の一切経のうち 2 部に脱定型の作品が含まれていることになる。本発表では、これらのうち、中尊寺金銀交書一切経（天治 3 年〈1126〉供養）に含まれる脱定型の経絵を対象としてとり上げ、経絵様式の特徴について再考する。

中尊寺金銀交書一切経については、京都国立博物館が主催した「金剛峰寺所蔵中尊寺経を中心とした中尊寺経に関する総合的研究」の報告書に、全 4231 件にのぼる見返絵のデータが報告されている。その中で脱定型に分類できるのは全体のわずか 2 パーセントであるが、それら脱定型作品は、図様的に変化に富み、画技の上でも秀逸なものが多く、創意に富んだ絵画表現が認められる。特に中尊寺金銀交書一切経にみられる、銀泥の量しを用いた雲霞表現（六十華嚴巻第 57）や金銀泥散らしを用いた波の描写（大集経巻第 22）などは、『伴大納言絵詞』（12 世紀後半）などの絵巻において効果を発揮している鑑賞性を高めることを目的とした技法である。本発表では、比較対象として、鑑賞用の彩色絵巻という絵画としてのジャンルも材質も異にする作品を取り上げ、経絵が平安時代絵画史において如何に位置づけられるかを考えたい。